
persona

久和良悟真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

person a

【Zコード】

Z5881A

【作者名】

久和良悟真

【あらすじ】

7月の第2週、私のクラスに奇妙な転校生がやってくる。名前は架神キヨウスケ。私は、彼の正体を町の夏祭りで聞かされる…

彼は突然転校してきた。

夏休みも間近に迫った、7月の第2木曜日だった。

「はい。みんな、聞いてくれる?」

担任の香川静香先生がそう言つと、みんなのざわめき（もちろん私も入つていて）が消えた。

「よし、首尾がいいね。それじゃ、本題。今日新しくこのクラスの一員になる人がいます。さあ、入ってきて」

香川先生が開いたドアから廊下に向かつて手招きすると、彼は入ってきた。

私は一目見て、ドキッとした。

それは、別に運命の出逢いだと、一目惚れとか、そういうた類じやない。

私がドキッとしたのは彼の顔を見たからだ。
何かおかしかった。

一瞬、真っ白な… そう、ちょうどガストン・ルルーの小説に出てくる、オペラ座の怪人の仮面をしているかのような顔だつた。
けれどもう一度良く見ると、もつその仮面はなくて、いたつて普通な顔になつた。

「架神キヨウスケです。よろしく…」

「はい、それじゃあ席は… ノミの隣ね。」

香川先生は教室内をぐるりと見回してからそう言つた。

その席とは、つまり私の席の前だつた。

何故かわからないけど、ノミはとてもうれしそうな顔をしている。

私といえば、もう彼の顔が怖くてたまらなかつた。

もう一度あの顔が見えたならどうしよう。

あの仮面のような顔が…

休み時間になつて、架神くんがいないときを見計らい、私はユミに訊いてみた。

「ねえ、彼の、架神くんの顔つて…」

私が全部言つ前に、ユミはにんまり笑つて口を挟んだ。

「超よくない？あたし好みなんだけど…」

「えつ？！」

彼の顔がいい？

私は自分の耳を疑つた。

ユミのタイプの人とは、まったく違うと思つたのに。

それに、彼の顔…

私には、この友人が何を考えてこう言つのかがわからなかつた。

驚くことにクラスのみんな、うつん、彼を見た友人はみんな、『かっこいい、自分のタイプだ』といつた。

やれ芸能人の誰に似ているだの、スポーツ選手の誰に似ているのだ… だけど、不思議なことに、似ている、と挙げられた芸能人は多数いた。

どういうことなのかわからないけど、もう彼には関わらないほうがいいと直感した。

私は努めて彼を見ないようとした。

7月の終わりに、私の住んでいる町のお祭りがあつた。ユミや他の友達と待ち合わせをして、屋台を歩き回つたり、わたあめを買つたりして、最後に花火を見に行くことになつた。その途中で、私はみんなとはぐれてしまつた。

どこに行つたのかわからない。けど、とにかく花火の見えるトコにいるだろうと思つて、しばらく一人でとぼとぼと探し歩いていた。そんなときだつた。

「あれ？たしか君は…カイリさん、だよね？」

私はいきなり自分の名前を呼ばれたので、ビックリして声のしたほ

うを振り返った。

するとそこには彼…架神くんがいた。

「え、ええ」

私は突然のことだったので、どうしようかと慌てた。

「どうしたの？ 1人？」

「ううん。ちょっと、友達とはぐれちゃって…」

「へえ、それは大変だね」

一瞬の沈黙。

「あ、ああ。 その…一緒に探そつか？」

「えつ？」

「もし君さえよければ、僕も一緒に探すよ

私は考えた。

彼は何を考えて言つのだろうか？

まさか…？

いや、そんなことあるわけがない（それこそ自意識過剰というものだ）。

私だって、そんな美人な方じゃない。 平均的な、どこにでもいそうな娘だ。

彼にしても、ちょっとした気まぐれなんだと思うことにした。

私はおそるおそる（そعدだとバレないよう）に頷いた。

結局ユミたちは見つからなくて、何故か私は成り行きで架神くんと一緒に花火を見ることになった。

花火と言うのは、近くで見ると迫力があつていいのだけど、その分

音がうるさいって堪らない。

「君は、誰の顔に見える？僕の顔…」

そんな中、架神くんは言った。

一瞬、何のことを言つているのかわからなかつた。

「…別に、誰にも見えないよ。架神くんは架神くんでしょ？」

とりあえず、そう答えた。

すると、彼は驚愕したような顔をした。

そして、次の瞬間には笑みを漏らしていた。

「そうか…やっぱり君には無いんだね」

「何のこと？」

「仮面さ。わからない？」

そう言つと、彼の顔がみるみる変わつていつた。

そう、例の仮面だった。

「あやつ！？」

「…わかつただろう？これが仮面さ。」

もう架神くんの顔は元に戻つていた。

「…どういうことなの？」

そこには意外と落ち着いている自分がいた。

「人は幾重もの仮面をかぶつて生きている」

「よく、わからないよ」

私は首を振つた。

「…いいんだ。たぶん、今ままだとわからない。君はまだ、仮面を創りだしていないんだから」

「私は？みんなはもう？」

「大概の人は持つてている。それこそ何十枚も何百枚もね」

「…でも、それがあなたの顔とどう関係があるの？」

「それは…欲望さ」

「欲望？」

「そう、人間は欲望の塊だ。もちろん君みたいな例外もあるけどね」
架神くんは私をまじまじと見つめると微笑んだ。

「人間は誰しも、自分はこうありたい。他人にはこうであつて欲しい。そう、理想を追い求めている」

「それが、あなたの顔に？」

架神くんは頷いた。

「僕の顔はみんなの願望によつて変わる。君が見たのは僕のオリジナルの顔だよ。」

私は長く、深い溜息をついた。

「あなたはいつたい？」

私が問うと架神くんは微笑んだ。

「僕は仮面だよ」

「嘘！ だつて……」

「ウソじゃない」

「じゃあ？」

「……もう、お別れだ。」

架神くんは言つた。

花火が上がり、弾ける音が聞こえたときにはもう、架神くんの姿は私の目の前から消えていた。

(後書き)

拙い文章で、言いたいこともままならない作品です。
最後まで読んでくれた方、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5881a/>

persona

2010年12月16日01時55分発行